健康とくらし

第291号　2023年5月

発行責任者：大塚　研二
岐阜健康友の会
岐阜市北山1丁目13番11号
事務局／TEL（058）244−3522
FAX（058）215−7877
E-mail　tomonokai@gifu-min.gr.jp

2023年2月末日現在
会員数：10,909人
基金人数：1,698人
基金合計：4億9391万6千円

●会員変更は下記へ
ご連絡ください
☎058（241）2018
（洞田）

場面に応じた感染対策の必要性

～ 後退・現状維持ではなく、前進するために ～

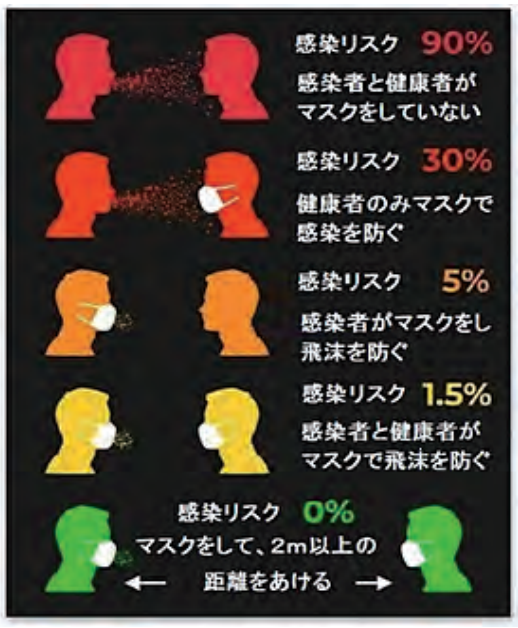
みどり病院　薬剤部部長　今西　正人

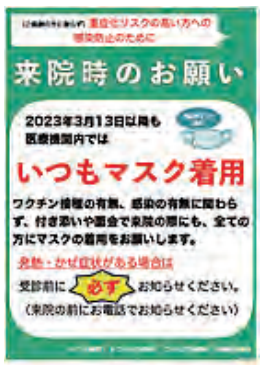
5月に第9波が来ていないといいけどな…と考えながら3月にこの記事を書いています。

2023年5月8日から、新型コロナウイルス（covid-19）感染症は、感染症法上の取り扱いが「2類相当から5類へ」変更となります。「コロナは終わりだ」と思いがちですが、「国からの補助（＝公助）」が終了するだけで、従来とはまったく異なる性質のウイルス感染症であることには変わりありません。

本当に気を付けていただきたいのは、「法的にはインフルエンザと同等の扱い」となっても、「covid-19 の病原性、変異、後遺症」が弱くなったわけでない：すなわち法的な扱いが変更されただけであって、法に合わせて「弱くなってくれた」訳ではない、ということです。

数多くある予防方法の中で、安価で確実な方法の一つに「マスクの着用」があげられます。コロナ禍となり、世界中の人が「飛沫」「エアロゾル」のことを意識しマスクを着用した（※日本人はほぼ全員）ことにより、インフルエンザの流行を抑え込んでしまったことは特筆に値します：コロナ禍前は毎年インフルエンザの集団感染・学級閉鎖を繰り返していたのに、ピタッとなくなったのです。コロナ禍以前より、冬期にマスクを着用する方はもちろんいました。しかし「全員」「常時」着用ではありませんでした・・・ここがポイントです。また黙食は「目に見えないマスク装着状態」とも言えます。コロナ禍以前は、誰かれ構わず唾液を飛ばしながら食事をしていたと思うとゾッとしますが、これも感染予防として大変役立ちました。





covid-19 が消滅したわけではないため「コロナ禍前の生活には、ウイルスが消滅しない限り二度と」戻ることはできません。「コロナ禍前の生活に戻る＝後退」なのだという発想の転換が必要です。

「コロナと共存（With コロナ）」するためには「前進（進歩）」しかありません。そのひとつが場面に応じた感染予防であり、マスクの着用になります。マスクの科学的な効果は数多く示されています。

ご質問・お問い合わせは、下記までご連絡下さい
みどり病院　058-241-0681
薬剤部　今西まで

院長としての新病院への想い

みどり病院長　松井　一樹

新みどり病院は、『地域にひらかれた、みんなにやさしい病院』をコンセプトに2024年5月のオープンを予定しています。すこやか診療所（一部機能除く）と合体する新みどり病院の『医療・介護』の事業活動は、『広く、手厚く』を目指しています。

さて、新病院建設、岐阜勤医協第7次長期計画策定の議論の中で、みどり病院の事業活動や地域での課題について、みなさんからお伺いする機会が幾度もありました。やはり、「地域には、多種多様な課題があり、一筋縄では解決できない。何でも相談できて、あらゆる課題に解決の方向性を見出せるような拠点をつくり、その取り組みを事業として立ち上げることができないか？」と考えました。

私たち医療従事者は、「病院に来る患者さんにとって、暮らしの中に医療が大部分を占めている」と考えがちで、入院されない限り、なかなか生活全般まで慮ることができません。逆に、病気でない方にとっては、医療や介護は「暮らしの中のほんの一部であり、病気でなければ関係ない」ことと思います。

しかしながら、高齢化が進むこの地域には、暮らしの中のお困りごとがいっぱいあります。こういった、お困りごとを解決する、あるいは、統合して対応する『非営利協同の事業』を友の会や地域の方々と展開できないかと想っています。

そして、それは『民営化』ならぬ、公正な『市民営化』事業であり、「利益は出すが、利潤は求めない」『資本論』の実験的取り組みの始まりかもしれません。

記念企画でやりたいこと（想い）

新みどり病院オープン記念マラソン大会はどうでしょう？こがねだ→みどり→あんきの家→華陽→しずさと診→しずさと介護（垂井）（AM09:30スタート、17:00閉門：42.195Kmになるように。途中までのランも可。7時間あれば、松井ゴールできます。たぶん。）

患者様の言葉が看護師のパワーの源

みどり病院　総師長　宇野　麻子

私たち、民医連看護師は「患者様の立場に立ち患者様の要求から出発し患者様とともにたたかう」という大切にしている視点があります。一人ひとりの患者様・利用者様の生活から出発し、何を望み・何を大切にしているのか知る事から関わりを始め、「その人らしく暮らし続けることを支える」ことを目標に日々看護実践を積み重ねてきました。

皆様との出会いの中で多くの言葉をいただいています。「何度失敗してもよいよ」と言ってくださった言葉に、技術を磨かせていただきました。「なぜ新人一人でケアをするのか」との言葉に、患者様の不安な気持ちを聞かせて頂き学びました。「あなたたちがいてくれたから頑張れた」とのご家族からの言葉には、達成感を感じられました。最近では「お互い年をとったから、体を大事にしてよ」とスタッフの体調まで心配してくださる方も・・・私たち看護師は本当に多くの言葉に励まされ、時に涙し、支えられ、看護師として成長をさせていただいています。感謝しかありません。

しかし、病院の役割が変化していく中で、「個室が足りない」「機能回復のための環境が不十分」「プライバシーが守られていない」「診療所からの移動が大変」「トイレが狭い」などなど多くの課題を抱えていました。

当院を利用される患者様・ご家族様には大変ご迷惑をおかけしています。新病院では「地域にひらかれた、みんなにやさしい病院」を目指し、取り組みを進めています。病棟機能では大幅に個室を増設することで、プライバシーの確保を行うと同時に適切な療養環境の提供を行います。また、回復期リハビリテーション病棟とリハビリ室を同一フロアーにすることで、機能回復への取り組みを強化していきます。外来機能ではかかりやすさを追求していきます。

今後も「皆様からの言葉をチカラに」地域の皆様の思いに応えられるように、日々の精進を忘れず、様々な課題に取り組んでいきたいと思います。

健康春秋

戦前の三池炭鉱では、馬が炭鉱地下で石炭を運ぶ仕事をしていました。ところが一度地下に降ろされると、死ぬまで地上にでることができず酷使され、粗食と重労働で二年ほどで死んでいきました▼また、大きな無窓の鶏舎をご存じでしょうか。何段にも積み重ねられた小さな、向きを変えることもできないゲージの空間で、卵を産み続ける鶏もまた、自由に歩き回ったり青空を見ることもなく死んでいきます。これまで卵の値段が安かったのは、鶏をひたすら酷使し、搾取してきた結果なのです▼EUではこの飼い方は禁止されています。アニマルウェルフェア（家畜福祉）という考えかたがEUを中心に広がっています。犬や猫を飼っている人なら、動物にも喜怒哀楽があり、愛情に応えてくれる身近な存在です。その動物に思いを巡らすことの大切さ、それを徹底すると菜食主義者になる必要がありそうですが▼ところで福島第一原発の近く浪江町で「希望の牧場」という名で、牛を飼っている人がいます。放射能汚染の危険にさらされながら、多くは見捨てられ餓死していった牛を、飼い続ける人がいます。経済的利益がなくても、牛飼いとして見捨てることができず、牛たちの命を見つめることで、原発の愚かさを告発しています。ここにこそ、アニマルウェルフェアの精神が生きているようです。（K）